

『免疫学者のパリ心景 新しい「知のエティック」を求めて』

矢倉英隆 著

●定価 3,960 円(税込み) ●四六判 362 頁 ●医歯薬出版刊

●発行年月：2022 年 6 月 ●ISBN978-4-263-20688-1



これまでと違った自分を見つめなおす書

著者の矢倉英隆先生と初めてお会いしたのは、日本パスツール財団が開催した研究会であった。その研究会ではパスツール研究所の元所長であるフィリップ・クリルスキー博士が招聘講演を行ったが、私はクリルスキー博士のもとに留学していたので、久しぶりに彼に会うために研究会に参加した次第である。その際に、彼の著書である *Le Jeu du hasard et de la complexité - La nouvelle science de l'immunologie* 『免疫の科学論—偶然性と複雑性のゲーム』（みすず書房刊）を矢倉先生が翻訳されたことや、本誌にエッセイを連載されていることをお聞きした。それ以来エッセイが掲載される度に原稿をお送りくださったが、2018 年 6 月 24 日に初めていただいた vol. 68 には翻訳のことに触れられており、その後 vol. 105 の完結まで毎回楽しみに読ませていただき、矢倉先生の「科学の形而上学化」を目指す姿に触れることができた。

本書には、免疫学者である矢倉先生が、フランス語を学び、哲学的思考にいざなわれ、さらにはソルボンヌで大学院生として哲学を学ぶに至った経緯から説き起こし、免疫学・医学から哲学への旅に出て、思考の境地に至るまでの過程を辿るエッセイの内容が体系的にまとめられている。第 1 章には、なぜ科学から哲学に向かわれたのか、なぜフランスでなければならなかったのかが紹介されているが、パリをはじめとするフランスの情景の中で、何事にもとらわれることのない思考を重ねる「全的生活」を送ることこそが、物事の本質に触れる「科学の形而上学化」に身を委ねるのに必然的であったのではないかなと思える。第 2 章・第 3 章では「人類の遺産に分け入る旅」として、ギリシャ哲学から近代・現代哲学に至るまで、矢倉先生が研究され啓示を受けた哲学者たちの思索が、時空を超えてあたかも同じ場所、同じ時に交わされたかのように展開されているが、このことがまさに哲学の醍醐味であると思える。つづく第 4 章で本題の「科学の形而上学化」の必然性とあり方が展開され、第 5 章ではこれからの課題や展望が紹介されている。

本書は、矢倉先生の眼と心と言葉を通して、私たちに「科学の哲学」に触れる場を与えてくれる。本来は一体であった科学と哲学が、近代の歴史の中であたかも相反する手法に基づく学問であるかのようになったところを、あらためて「科学の形而上学化」として融合し高みに向かう姿には、医学に身を置く者ならずとも感動を覚えるだろう。本書を読み終わると、これまでと違った自分を見つめなおしていることに気づくと確信する。

(木村彰方/東京医科歯科大学副学長)